

SDGsってなんだろう? 「海」を切り口に楽しく学ぶ 出張授業開催



SDGs(Sustainable Development Goals)は2015年9月の国連サミットで採択された、2030年までによりよい世界をつくるための持続可能な開発目標です。小学校でも来年4月以降、他者を尊重し、多様な人々と協力して「持続可能な社会の創り手」になってもらうための学校教育がスタートします。

こども海の学習プログラム普及プロジェクト実行委員会では、「海」を切り口にSDGsを楽しく学ぶ出張授業を全国の小学校で開催しています。第6回から第8回目の授業の様子を紹介します。

子どもと海のSDGs SDGsってなんだろう



「冬は寒さを克服して」「火を使わずに夜の暗さを克服して」。キーワードが次々と出てきます。そこで手島先生が問いかけます。「個人の幸せにつながるものは赤いカード、みんなの幸せにつながるものは青いカードを挙げて下さい」配布されたカードを、子どもたちが一斉に挙げます。水不足については、ほとんどの

子どもたちは、まわりの友だちとも相談しながら、ワークシートにどんどん書き込んでいきます。「食べ物の問題だけじゃない。私たちが人間は、これまでにどんな問題を克服してきたのか、考えてみましょう」として、子どもたちに質問します。

「土器を使うことによって人は硬い木の実や貝などを煮て食べられるようになった。それが、食料危機の克服につながりました。縄文土器は、ものすごく役に立っただけで、そして、子どもたちに質問します。

「何かを克服するということは、世界をより良いものにするということですよ」と手島先生。「みなさんの住むこの世界が、この先もずっと豊かに続いていくために、克服しなければならぬ問題は何かでしょうか？」

子どもたちはそれぞれの考えを、付せん紙にメモしました。そして、自分が書いたメモの言葉を、「持続可能な開発目標」(SDGs)の17の目標と見比べてみました。

「私たちが人間は、これまで何を克服してきたか。これから私たちが克服しないといけないことは何かを克服する」ということは、世界をより良いものにするということですよ」と手島先生。「みなさんの住むこの世界が、この先もずっと豊かに続いていくために、克服しなければならぬ問題は何かでしょうか？」

広島県 広島市立中野東小学校 [5年生 61名]

「海の温暖化は私たちの生活に大きな影響を与える」広島市立中野東小学校では、2時間目の授業を科学ジャーナリストの山本智之さんが担当しました。



山本さんは新聞記者としてさまざまな分野の取材を行っています。取組んでいるのは「海」です。日本はもちろん南極海やガラパゴス諸島など世界の海に潜り、取材をしています。「日本は海に囲まれ、私たち

はその恵みをたくさん受けていますが、実は今、海でも克服すべき問題があります。沖繩の海のサンゴ礁の写真を映し出しながら紹介してくれました。「サンゴは本来濃い色をしていていますが、全体が白くなる白化現象が起きています。その原因は海水温の上昇です。サンゴはイソギンチャクの仲間、体のなかに自分でいる褐虫藻という藻類が光合成をし、その栄養をもらって生きています。しかし、水温が上がると褐虫藻がいなくなるため、栄養失調になって死んでいくんです。」

「サケは冷たい水が好きです。海で成長して川に戻り産卵しますが、北の海で冷たい海水のエリアが減り、将来は日本の川に戻れなくなる可能性があります。温暖化が予測されています。温暖化が予測されていると、サケやイクラを食べられなくなるかもしれません。」



海の温暖化で将来、日本にサケが戻って来なくなるかもしれない、という話から、地球温暖化についてもっと関心を持つようになった。【5年生女子】
海についていろいろ知ることができた。特に、沖繩のサンゴの白化を止めるためにどうしたら良いか僕たちも考えていきたい。【5年生男子】

宮城県 仙台市立東長町小学校 [5年生 114名]

「海の自然を守るために私たちにできることは」仙台市立東長町小学校では、東海大学海洋学部博物館の学芸員伊藤芳英さんが、2時間目の授業を担当しました。



伊藤さんはまず、地図を使って静岡県の駿河湾について紹介しました。「駿河湾は日本一深い湾です。海底の谷は2450メートルの深さがあります。伊藤さんがふだん働いている博物館は、駿河湾に面した

三保海岸の近くにあります。三保海岸には、貝殻やヒトデ、ウミナシなどの生物、ときにはクジラも打ち上げることがあるそうです。そして、三保海岸の大きな特徴は、銀色に輝く「ミスウオ」という深海魚が、生きたまましばしば打ち上げることです。全長は60センチ〜140センチほど。伊藤さんの博物館では、打ち上がった個体を解剖し、海の中でミスウオがどんなエサを食べているのか、調査を続けています。

長年の調査の結果、昔に比べてごみが見つかる確率が上がっているそうです。伊藤さんは、実際にミスウオの胃から出てきた様々なプラスチックごみを学校に持参しました。「大きさが5ミリ以下のプラスチックごみ。マイクロプラスチックといます。伊藤さんが説明しました。海辺の砂の中にひそむマイクロプラスチックの現状を、子どもたちは目の当たりにしました。伊藤さんは授業の最後に、「海は自然にできることからは、行動していただきたい」と呼びかけました。



海岸の砂の中に入っている小さなプラスチックごみを初めて見た。元々はきれいだっただけなのに、海が汚れてしまっている。【5年生女子】
魚の胃の中にプラスチックごみが入っているという話は、初めて聞いた。これからは、海にごみを捨てないようにしたいと思った。【5年生男子】

大阪府 大阪市立南小学校 [5、6年生 62名]

「私たちの力で地球の未来を変えよう」大阪市立南小学校では、2時間目の講師を京都造形芸術大学教授の竹村真一さんが行いました。デジタル地球儀「触れる地球」を使って授業を行いました。



竹村さんは、子どもたちに問いつけながら、まずはリアルタイムの地球の様子を映し出しました。地球上には台風の白い雲も見えます。地球の表面積の7割は海洋です。竹村さんは「地球というより、水球と呼んだほうがいいよね」と子どもたちに話しました。

そして、地球が太陽からほどよい距離にあり、大気と海があるおかげで、地球の気候が安定していることを解説しました。「海水はしよっぱくて飲めないうえ、でも地球が私たちに住む心地のいい星であるのは、海のおかげです。海水温を色分けして表示すると、黒潮やメキシコ湾流など、海のなかでミズウオがど

どの海流によって、高緯度の海が温暖化されているの手に取るように分かります。ザトウクジラの回遊経路も表示。竹村さんは、ザトウクジラが、プランクトンの豊富な北の海へ回遊していることを説明しました。そして、最後のテーマは、海の危機について。プラスチックごみが海流によってハワイ周辺などに寄せ集められる様子を見ました。



子が動画で表示されました。さらに、温暖化への対策が進まない、地球の気温が将来どんどん上昇してしまうこと、その一方で、私たち人類がしっかりと対策を進めれば、温度の上昇を一定レベルに抑えられることが、地球儀の色の変化から分かります。竹村さんは「人類は大きな力を持つようになったいま、未来を変え、地球を良くすることもできます」と語りかけました。